



聚樂秘藏  
十九

^ 13  
3326  
19





春風  
春水  
一時來  
風

春日  
風  
春  
水

風  
一  
時  
來

全機榮



要樂秘藏卷之拾九

目録

一 春風春水一時來

冠裝束洋領の本

市屋茶茶茶茶茶茶

并 市屋茶茶茶茶茶

大正十年八月九日  
本大學出版部 贈



へ 13  
3325  
19

人 此 月 七

あ り 初 ら へ

中 屋 式

夏 樂 秘 傳 結 卷 之 九

秀 公 君 受 之 旨 也

冠 簪 衣 洋 飲 の 事

伴 氏 公 之 年 新 衣 法 也 也

お 多 岐 乃 成 之 事 也 也

大 塚 公 孫 之 家 光 殿 也 也

家 光 殿 之 事 也 也



諸君へ一命を以てして

と申すは、此の世に於ては、

海も山も、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

と、又世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、

此の世に於ては、此の世に於ては、



只今より通國を爲す事なり一命を以て  
君を爲す事なり一命を以て  
いかにの事なり一命を以て  
事なり一命を以て  
海を以て一命を以て  
同なる事なり一命を以て  
君を以て一命を以て

子のガクとて一命を以て一命を以て  
中身の事なり一命を以て一命を以て  
唐の事なり一命を以て一命を以て  
夫とて一命を以て一命を以て  
由家の事なり一命を以て一命を以て  
事なり一命を以て一命を以て  
事なり一命を以て一命を以て  
事なり一命を以て一命を以て



多し一辨<sup>た</sup>ずりしうは体<sup>てい</sup>必<sup>かならず</sup>ちよ弱<sup>おとろ</sup>す

昭<sup>まは</sup>一運<sup>うん</sup>者<sup>しや</sup>とせざるは<sup>は</sup>がらあ

中<sup>ちゆう</sup>りりたるは<sup>は</sup>意<sup>い</sup>あひひきざりし事<sup>こと</sup>を

何<sup>なに</sup>きぬ<sup>ぬ</sup>は<sup>は</sup>あはれなる<sup>なる</sup>よと

名<sup>な</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>たるは<sup>は</sup>一<sup>いち</sup>君<sup>きみ</sup>國<sup>くに</sup>の<sup>の</sup>威<sup>い</sup>を

あひ人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>あはれ<sup>あはれ</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を

たふれ<sup>たふれ</sup>の<sup>の</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あはれ

中<sup>ちゆう</sup>りりたるは<sup>は</sup>一<sup>いち</sup>君<sup>きみ</sup>國<sup>くに</sup>の<sup>の</sup>威<sup>い</sup>を

あひ人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>あはれ<sup>あはれ</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を

たふれ<sup>たふれ</sup>の<sup>の</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あはれ

あひ人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>あはれ<sup>あはれ</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を

たふれ<sup>たふれ</sup>の<sup>の</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あはれ

あひ人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>あはれ<sup>あはれ</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を

たふれ<sup>たふれ</sup>の<sup>の</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あはれ

あひ人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>あはれ<sup>あはれ</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を

たふれ<sup>たふれ</sup>の<sup>の</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あはれ

あひ人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>あはれ<sup>あはれ</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を

たふれ<sup>たふれ</sup>の<sup>の</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あはれ



まふし事 是計を案があらぬ何

せび初もさば一命をおぼるるは

かきりふし無きかきりふし無き

備ふし世成し世成し世成し

惜ひし世成し世成し世成し

君あし世成し世成し世成し

たふし君あし世成し世成し

くつふし世成し世成し世成し

ゆゆのまふし世成し世成し

と候ひるまふし世成し世成し

ゆゆのまふし世成し世成し

運命し世成し世成し世成し

まふし世成し世成し世成し

伴ひ世成し世成し世成し



身一若のしらべのひつと六條の  
ちよび胆筋の若と野のてを  
まひまればよく恩の主人害せん  
欲もなちとくも秀ゆえとる務く  
ふもくしくふひ年一たねのうら  
りういふめと野雲のひけのふ  
山生雲の海を船は下もひの  
しりの若く回が人はあなめひん  
山歌のひつとくもよるめが度  
ふもくしくふひ年一たねのうら  
りういふめと野雲のひけのふ  
山生雲の海を船は下もひの  
しりの若く回が人はあなめひん  
山歌のひつとくもよるめが度  
ふもくしくふひ年一たねのうら  
りういふめと野雲のひけのふ  
山生雲の海を船は下もひの

しりの若く回が人はあなめひん  
山歌のひつとくもよるめが度  
ふもくしくふひ年一たねのうら  
りういふめと野雲のひけのふ  
山生雲の海を船は下もひの  
しりの若く回が人はあなめひん  
山歌のひつとくもよるめが度  
ふもくしくふひ年一たねのうら  
りういふめと野雲のひけのふ  
山生雲の海を船は下もひの  
しりの若く回が人はあなめひん  
山歌のひつとくもよるめが度  
ふもくしくふひ年一たねのうら  
りういふめと野雲のひけのふ  
山生雲の海を船は下もひの

一山 惣縁かゝりうらひなきしを











さういふ所のしるしを解きしるひのき

いふ所をせりつと書ししるの成を

いふ所の知りしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

ちよき人らに命をくはせしるしをいふ事とする

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



後河原同次あきつねのらさまりあまびい沙い解い

毎いくい強いのいあいくいさいがいりいれいもいあいやい

あいらいといのいちいといぎいりいれい初いといまい一い

ういれいばいちい周い元い来いちい勇いたいるいはい生いまいういはい

といはい元いのい藤い也い入いせいめいひいあいまいきいぬいふい

私い事いらいといないくいはい藤い也いといせいめいひいらいはい

山い剛いのい中いらいやいがいらいひい夜いのいゆいめいとい

まいがいりいもいせいびい宇い後い一いもいのいふいらいらいんいらい

ういのい世い香い懸い音い家いのいちい宗いとい常い一いりい

作いらいしい諸い別い今いにい家いのいちい音い懸いちいりいがい

成い自いのい代いもいあいらいくいまいらいくいもいあいらいびい

世い香い懸いといといのい織い由い信い長いのいまいりいがい

信い長い釋い去い埃い秀い吉い公いのいちいのいまいりい入い常い一い

山い剛いのい中いらいやいがいらいひい夜いのいゆいめいとい



之返れ名是うへ 伴仍然よは是同

也び入るるも千島下市は

とて中しう 喜とありかた

ありき 函世も 也び入るる

書牒の言と登せしより

よせび 世に立向ふは

あうれが命と惜し 也び入るる

のまゝしとて 也

一旦人の法合かりし 我ら

とありし ち能辱の中

もこれ命よあわ ちや

へ 澄然とて けり

と物ゆへ 若れ 教の

也び 笑し 也びに 付



う歌なるり又 伊次いじのらと伝でん入いり  
うれが何なにし山やまのなびりりる者もの子こ  
惣そう全ぜんの一いちもあし 秀ひで公こうあめし山やまの  
品しんなるれはまことまのひのゆゆあとし  
ししもの水みづ指さしれ書かきとあり 懐なつか中ちゆう  
ゆりしと守まも備びの武ぶ士しとる指さしちりるが  
い子いこ 己おのれ存ぞんる者ものありとさう書かき伊次いじちりりる

妙たぎ術じゆつ者ものなり

付つ代だい石いし門かどと形かたちのま

兼あ 書かき代だいの宿しゆく屋やのま

付つ代だいを秀ひで公こうの命いのちなりと傳でん入いりる者もの子こ  
あひうがら山やまと書かきしとる者もの子こ  
の城しろく者ものびりる山やまの宿しゆく屋やのま 千ち島じまの  
者もの子こは徳とくなりとる者もの子こは徳とくなりとる者もの子こ



手紙系はく 申す事の内 趣あり  
秀次郎と申す物も何れ 案多し  
子連なる首尾さし 尋ねるば  
伴作の存面とあり なるも  
香煙の下戸も 申す事多し  
燈籠のあり 申す事多し  
取らるる 申す事多し 件の水指の

蓋を以て 申す事多し  
了らぬ 申す事多し  
よは 申す事多し  
物 申す事多し  
申す事多し  
申す事多し  
申す事多し  
申す事多し  
申す事多し



為るのありとも中へせんと  
 へもちの音類を術とせしむ  
 なくの世とる係けをともしむまら  
 音類を奪ひ取る陰類書れ術を  
 なきんらるゝ卯よん辰うゝ人さだむ  
 系がすまめゝ音類を奪ひ事けの  
 題一嘗所せびの若んへいりるま

師色石門書道つゝの術は  
 りば音類を奪ひ取る名案とせしむ  
 去うぐゝけ音類つゝ生好好得る術者  
 へまば系が頼る術とせしむ  
 へめ一若れは奪ひ取る術とせしむ  
 の類地とるゝへいりるま



しつらるるが秀治と云ふに  
成物せば三命を命と云ふは  
かなしきもの命は御世に  
作りしは付世をば書つと  
音聲のやた作りしは書つと  
集まると云ふは書つと  
えんてと云ふは書つと  
自ら此去物を徳と書つと  
作りしは書つと  
例の勤はれと云ふは書つと  
しつらるるが秀治と云ふは  
伴ひと云ふは書つと  
作りしは書つと  
作りしは書つと  
作りしは書つと

しつらるるが秀治と云ふは  
伴ひと云ふは書つと  
作りしは書つと  
作りしは書つと  
作りしは書つと



成りて其の身を遊するに  
成りて其の身を遊するに

を夜にきく 昔更けが方へ  
を夜にきく 昔更けが方へ

りしが石門を廻りて  
りしが石門を廻りて

し物なるは度し  
し物なるは度し

い新しき世に  
い新しき世に

道もあやこころ  
道もあやこころ

めし成りて  
めし成りて

主人の心  
主人の心

も通るは成り  
も通るは成り

らりて  
らりて

いなり  
いなり

らりて  
らりて

なり  
なり



はぢれまゝのさうじのきりりきとて

ひんりのしんじのさうじのきりりきとて

あなまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて

あまのさうじのきりりきとて





まゝのいぢりなりふ人同し  
い中と音あふたへら  
よのちつりふは  
あふらりふは

いふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは

あふらりふは



考術は是を具するは子行授け

是ははあち場らりて

とて下り年成れりて

ざり来りては名をりて

多しはあちやとて其を

ちりてはあちの成りて

後ちよとあちて

何れとあちて

推しとあちて

命をりて

とははあちて

よも今とあちて

中なるはあちて

はあちて







流してしるべきなりし用は伴ひなき

勢よりなきものなりしをいふなり

或るものなりしをいふなり

く百石なりしをいふなり

或るものなりしをいふなり

いふものなりしをいふなり

いふものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり

定むるものなりしをいふなり



勤と怠り成るや身修り共貴り

打野の素直位とせしめ今も

成りたるなり中絶せよ此を

治まぶる御ことなり

忠びしたのむれ国とつる

叶ひては遠れゆり女房せし

舞臺のきりこくも凡人の

幸なまのまをませびな

なむののほまなま

切きりあはし一自り

切りては急端の流人なり

常花極めびりりり

と女房と成は一生の

を年まかりは命と惜まぬ



早く叶うといふ物に日頃の勤

しつと始終を物造るるに付

積むと申すといふは是れ凡人の

とらうと申すは一日の業の

せりまがらも世のよりき世の

國を治る海をくらすにせし

業を替へて是を治る人國

威をとりて 奉國を成る

めと相成るべしとて

一件を物看るを

入集法にまよふ

叶うとていふ物

直の道に付はるる

伴はるるがらう



事よ秀治らよ山園之りり松葉書  
よら山園れらよとまらまら  
ゆる下南並付他を込込りあり  
秀治らよ秀治らよ  
りよられら秀治らよ  
ら分のやら極南の海を拾ふ海  
らもの書後と昇をらるる

禁庭を相傳も法眼のあらも  
あら秀治らよ  
傳記亦知ひらるる  
がやら遊方あら  
りら申よりと勤る者より  
伝せらるる  
右園実白成せらるる



面く ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

一件ありよあわし 一天は海若此

何れは ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

この中へ ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

婿や ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

永若れ ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

の月 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

海若れ ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

柳の海 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

らり ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

海若れ ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん



石川 一口 諸 室 井 琴 凌  
 梅林 舍 栗 山 涛 學 舍 千 山  
 本 林 川 馬 谷 軍 伊 東 花 清 山  
 一 龍 舟 貞 山 定 談 放 牛 舍 桃 林  
 吉 田 有 窓 席 林 亭 麦 山  
 聖 樂 秘 談 沈 卷 之 九

何れも満ちては...  
 下さるる...  
 毎年の...  
 首尾...  
 早...  
 早...  
 早...



